

## 編 集 後 記

本誌編集委員会では15名の編集委員が5チームに分かれ、1チーム3名で3名査読のシステムをとっています。昨年までは再査読も含め月々10篇を超える、時には15篇もの論文が各チームに割り当てられることが通常でしたが、今年に入ってからその数が明らかに減ってきました。投稿数の推移を経時的にみますと、投稿数が少ない12月を除く一月平均は一昨年が原著/症例報告：10.9篇/14.6篇、昨年在11.8/14.0篇でしたが本年1月は7/13篇、2月は7/11篇、3月は5/15篇、4月は7/20篇、5月は9/10篇でとくに原著の投稿数の減少が顕著です。この原因を考えてみましょう。毎月の編集委員会では、ある論文の査読を担当したチームがその査読結果を他の編集委員全員に紹介し、意見を求めます。従って原著論文の原稿は再査読、時には再々査読になることもしばしばです。本年1号(Vol 30, No 1)巻末の‘会誌編集委員会より’の中で、大原編集委員長が“本会誌の英文誌化は当分は考えずに、日本語の雑誌の最高のところを現在は目指す”と述べておられます。そのために本誌が会員諸氏から敬遠されて、投稿数が減少したと言うわけではないと思います。その原因は以下に述べるあたりにあるように思われます。

業績評価の方策として英文論文偏重の現状では、“邦文論文をまとめるならばそれ+ $\alpha$ の労力を投入して欧文論文を仕上げよう、そして欧米の一流誌にチャレンジしよう”という気運が強くなりつつあり、指導者もそのように指導しているようです。日本の消化器外科学の国際化として好ましい展開ですが、その一方で邦文誌の空洞化という問題が新たに生じてきたわけです。邦文学会誌を英文誌化する趨勢にあるなかで、それらの英文誌への投稿数も伸び悩みといううわさも耳にします。これでは日本の学会誌は共倒れになってしまいます。何が何でも英文誌ではなく、英文誌の選別が必要でそのための見る目を養う時期に来ていると思います。

(安藤 暢敏)